

開經偈 (読經の願い)

無上甚深微妙法

このうえなきありがたきみ仏さまのみ教えを

百千萬劫難遭遇

いつの日にもまたいたたくことができましよう

我今見聞得受持

今ここに修証義をいたたくことができました

願解如来真実義

願わくは人のまことの道がわかりますように

正法眼蔵 修証義解説

『修証義』は永平寺御開山曹洞宗高祖道元禪師のおさとし『正法眼蔵』による正しい人生の道しるべであり、『修証義』とは仏道を修行し人生をさとする仏教の根本義という意味であって、仏教各宗に通ずる経典であります。

第一 第一章 総序

① 生を明らめ死を明らむるは仏家一大事の因縁なり、生死の中に仏あれば生死なし、但生死即ち涅槃と心得て生死として厭うべきもなく、涅槃として欣うべきもなく、是時初めて生死を離るる分あり、唯一大事因縁と究尽すべし。

1. 永遠の生命に生きる　人は、なんのためにこの世に生れたのでしょうか。生れたものは死なねばなりません。この生れたわけを明らかにし、その死のゆくすえを明らかにして、人生を尊く生きる道こそ、仏教徒の重大な信仰生活であります。いたずらに日を過していても、やがて必ず死が待っています。そのときになって死を恐れ今生の別れを悲しんではなりません。私たちは死んでどこへゆくのでしょうか。あの石のお墓の下へゆくのでしょうか。いえ、それは私たちの亡きがらであります。私たちのほんとうの生命は、私たちの愛するものの中へゆくのであります。子孫を愛した先祖の生命はその子孫の中に、人類を、祖国を、郷土を、教育を、芸術を、科学を愛したその人人の生命は、おのおのその愛したもののの中に生きてゆくのであります。さればこの百年に足りない生死を超えて、仏陀と共に生きる永遠の生命を悟ったとき、私たちは生死の苦悩を離れ、生をいとわず死をも恐れぬ『ねはん』極楽の大安心に、願うまでもなくやすらうことができるのであります。ただ、今生に生を受けたこの大事な因縁の尊さを、明らかに究め悟らねばなりません。

② 人身得ること難し、仏法値うこと希なり、今我等宿善の助くるに依りて已に受け難き人身を受けたるのみに非ず遇い難き仏法に値い奉れり、生死の中の善生、最勝の生なるべし、最勝の善身を徒らにして露命を無常の風に任すること勿れ。

2. 人と生れしは尊し この地球という天体に生命が發生して以来、何億万年の歲月を経て今日の人類に進化したのであります。それが私であり、あなたであります。これをただかりそめの偶然と思つてはもつたいたいではありませんか。しかも野蛮未開の時代はすでに過ぎて、今日尊い仏法をいただくことができたことは、いかばかりありがたいことかはかり知れません。人は誰しも尊い仏心をもって生れております。その仏心こそが、人間の尊さであり、良心の根源であります。私たちが、せっかく人間としてこの世に生れ得ても、自己本来の聖い仏心にめざめず、自ら自己の良心にそむいていたのでは、人間たる価値はなく、一向に良心なき動物とかわりがありません。どんなに人類の科学が進歩し、どんなに世界の経済が繁栄しても、その科学を利用して悪事をしたり、その経済の繁栄におごつて尊い仏心を忘れてしまったのではかえつて文明に逆行してしまいます。今ここに、尊い仏心をもつた人間として生れながら、いたずらな動物本能をほいままにして、あたり人生を無茶苦茶にし、大切な一生を、あえない無常の風にまかせてむなく終つてはなりません。

⑧ 無常 憑み難し、知らず露命いかなる道の草にか落ち
ん、身已に 私に非ず、命は光陰に移されて暫くも停
め難し、紅顔いづくへか去りにし、尋ねんとするに蹤跡
なし、熟観ずる所に往事の再び逢うべからざる多し、
無常忽ちに到るときは国王大臣親暱従僕妻子珍宝
たすくる無し、唯独り黄泉に赴くのみなり、己れに随
い行くは只是れ善悪業等のみなり。

3. 人生は無常なり 私たちの人生は一寸先のこともわからぬのであります。思
えば道の辺の草に宿る露の如くはかない生命であります。光陰は矢の如しと申します
が、時間が再び帰らぬように、もしも思わぬ病氣や突然の災難にあうときは、この身
はすでに亡きがらとなり、生命はたちまち永遠のかなたに去つてとどめることはでき
ません。美しくほほえむ紅の面影はいざこと歎きたずねてもかいなく、実はあなたも
私も今日の別れが永遠の別れとなるかも知れないのです。それを思うとあなたと私が
今日生きていることがほんとうに尊くなるではありませんか。無常の風がたちまち吹
いて来ると、国王大臣といえどもどうすることもできぬばかりか、この世の幸福と思
った財産も、地位も、親族も、最愛の妻子をも何もかも残して、ただ一人この世を去
ってゆくのであります。自分にしたがって来るものは、私たちが生前に行った善いこ
と悪いことが、子孫や社会に及ぼすその業のみであります。そしてその善いこと悪い
ことが、この世を去って後もお、その人の名と共にどこまでもどこまでもついて来
るのです。明日知れぬ今日を尊び、人生を美しく生きようではありませんか。